

## フランス6人組とプーランク — ピアノ曲を中心に —

浅見 英夫

(平成3年9月30日受理)

### The French Group of Six and Poulenc — with Piano Pieces as Central Figure —

Hideo ASAMI

(Received September 30, 1991)

#### はじめに

フランス音楽界の波として登場した6人組の命名は1920年1月16日の芸能批評誌「コメディアン」の記事で、批評家アンリ・コレによってなされた。これは1860年、ロシア国民楽派バラキレフ、キュイ、ボロディン、ムソルグスキー、リムスキー・コルサコフにより結成されたロシア5人組をまねて呼ばれたものである。

フランス6人組の目指したものは本来のフランス音楽であるクーブランやラモー等の古典に立ちかえて考えようとしたのである。ミヨーの言葉を借りると「フランス音楽の特徴は、次にあげるものなかに見出されるべきである。ある種の明瞭さ、簡素な表現、ゆとり、適度なロマンティズム、そして明瞭簡潔に表現しようとする時、作品の構想と構成のバランスを考慮することである」と述べている。このグループの中で最も多いピアノ曲を書き、名ピアニストでもあったプーランクの作品をみると、彼自身超絶な技法をもちながら、簡潔でわかりやすい曲を書いている。まだ没後30年にもならない作曲家でありながら、難解な曲でなく、あたかも古典の作品に新しい香りをつけたような作風である。

6人組のメンバー、その中のプーランクについて述べてみたい。

#### 1. 6人組

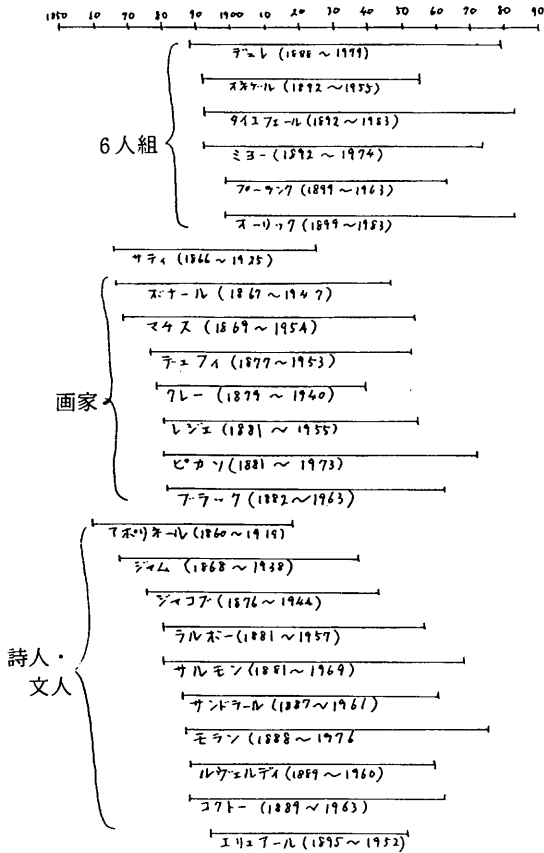
ダリウス・ミヨーとアルチュール・オネゲルの出会いは1911年、パリコンセルヴァトワールにおいてである。この2人によって土曜の集会在ミヨーのアパートで始まり、1912年にジェルメンヌ・タイユフェール、1914年に  
児童学科

ジョルジュ・オーリックと4人が知り合うことになる。1915年エリック・サティはヴァランティンヌ・グロスの家でジャン・コクトーに出会う。1916年にフランシス・プーランクは彼のピアノの師リカルド・ビニェスを通してジョルジュ・オーリックやエリック・サティを知る。その後、コクトーを中心にサティ、後の6人組と呼ばれる作曲家達が土曜の集会を行ない、そこには画家達や詩人、文人達も集うようになっていた。画家達のメンバーにはアンリ・マチス、バプロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック、ピエール・ボルナール、ラウエル・デュフィ、ポール・クレー、フェルナン・レジェ等であり、詩人、文人の中にはギョーム・アポリネール、アンドレ・サルモン、ブレイス・サンドール、フランシス・ジャム、ヴィレリー・ラルポー、ピエール・ルヴェルディ、マックス・ジャコブ、ポール・エリュアール、ポール・モラン等である。

1920年、6人組の小機関誌「ル・コック」を発刊し、4号までつづいた。それより2年前、コクトーは「雄鶏とアルルカン」の中で6人組やサティの音楽美学を提唱した。6人組関係のコンサートは1917年6月にサティ、オネゲル、オーリック、デュレ、1918年1月にオネゲル、ミヨー、オーリック、タイユフェール、同年2月にタイユフェール、オネゲル、オーリック、デュレ、プーランクの作品で行われ、1919年4月に6人組だけの作品だけによる最初のコンサートが行われている。又、1920年3月にも行われていて、年末の6人組コンサートではオネゲル、ミヨー、オーリック、プーランクの作品により行われた。

6人組共同の作品集は唯一冊だけで「6人組のアルバム」として1920年5月に出版された。そこに集められた小

表1 6人組とその周辺の芸術家年表



品はオーリック「プレリュード」、デュレ「無言歌」、オネゲル「サラバンド」、ミヨー「マズルカ」、プーランク「ワルツ」、タイユフェール「パストラル」である。この他デュレを除く5人の分担で作曲されたものにバレエ音楽「エッフェル塔の花嫁、花婿」があり、コクトーの企画したものである。

彼等の目指したものは絵画においては点描主義の印象主義から純粋な色にもどろうとしたし、詩歌においてはセンチメンタルものからオブジェの簡素化をねらったし、音楽においてはドビュッシーのやわらかな金色、音、霧や水のきらめきを描いたものから透明さと輪郭の強調である。

時代の流れからみても、印象主義の時と同様に、絵画が先に来て、音楽はその刺激を受けている。この時代の画家達と作曲家達の年令をみても10年位の開きがある。

文学的な影響はオペラや歌曲のテキストになるので直接的である。

6人組の音楽テクニクの面からみると、メロディを第1に重視している。明確な線と純粋な抒情への復帰、しかも、しなやかに自由に歌うことである。ハーモニーの面では長7度とその転回の2度が短9度を使っていて、メロディ全体を長7度に重複している。また、バスを長く同度音でつづける1種の非和声音、オスティナートをを用いている。リズムは単純なもので規則正しいリズムを好んだ。断片の積み重ねのような短く展開のない作品が多い。

## 2. 6人組のピアノ曲

6人組のピアノ曲は多作ではないが、プーランクが最も多く、約50曲書いている。作曲家別にまとめてみると次のようになる。(代表作のみ)

デュレ

4手のため2つの小品「鐘」「雪」(1916)

ノクターン(1928)

ソナチネ(1929)

オネゲル

3つの小品(1915, 1919)

トッカータと変奏(1916)

7つの小品(1919)

サラバンド(1920)

ロマンの音楽帳(1921~1923)

小協奏曲(1925)

ルーセルを讀んで(1928)

2台のための組曲(1928)

バッハの名による前奏曲、アリオーゾとフーガ(1932)

2台のためのパルティータ(1940)

2つの素描(1943)

シヨパンの思い出(1947)

タイユフェール

2台のピアノのための「野外遊戯」(1918)

パストラル(1924)

ピアノ協奏曲第1番(1924)

2台のためのピアノ協奏曲(1931)

ミヨー

組曲(1913)

ピアノソナタ第1番(1916)

ブラジルへの郷愁(1920~1921)第1巻6, 第2巻6

2台のピアノのための「スカラムーシュ」(1937)  
 世帯もちのよいミュージズ(1944)  
 ピアノソナタ第2番(1949)

オーリック

小組曲(1921)  
 ソナチネ(1923)  
 ピアノソナタ(1931)  
 2台のピアノのためのパルティータ(1955)

プーランク

3つの無窮動(1918)  
 ピアノ連弾ソナタ(1918)  
 ワルツ(1919)  
 6つの即興曲(1920)  
 組曲(1920)………全3曲  
 プロムナード(1921)………全12曲  
 ナポリ(1925)………全3曲  
 羊飼の少女(1927)  
 2つのノヴェレッテ(1928)  
 3つの小品(1928)  
 A. ルーセルを讃えて(1929)  
 8つの夜想曲(1929~1938)  
 ナゼルの夜会(1930~1936)……前奏曲, 8変奏, 終曲  
 15の即興曲(1932~1959)  
 2台のピアノのための協奏曲(1932)  
 村の女たち(1933)  
 アルバムの綴り(1934)  
 2つの間奏曲(1934)  
 プレスト(1934)  
 パディナージュ(1934)  
 ユモレスク(1934)  
 フランス風組曲(1935)………全9曲  
 オーヴェルニュ館の舞踏会(1937)  
 メランコリー(1940)  
 間奏曲(1943)  
 ピアノ協奏曲(1949)  
 主題と変奏(1951)  
 2台のピアノのためのソナタ(1953)  
 ノヴェレッテ第3番(1960)

これらの曲の中で比較的演奏頻度の高い曲はオネゲルの「バッハの名による前奏曲、アリオーゾとフーガ」、ミヨーの「ブラジルへの郷愁」、「スカラムーシュ」、それにプーランクの「3つの無窮動」、「ナポリ」、「ナ

ゼルの夜会」、「3つの小品」、「15の即興曲」の中の数曲、「2台のピアノのためのソナタ」等であり、プーランクの曲のみでリサイタルのプログラムを組まれることもある。

3. プーランク

プーランクは1899年1月7日パリに生まれ、1963年1月30日パリにて64才の独身の生涯を終えている。5才より母親に、15才よりスペインのピアノ教師リカルド・ビニェスにピアノの指導を受けている。6人組の中で最も秀れたピアノ奏者であったプーランクは全作品160曲の約3分の1をピアノ曲で占めている。1917年の「ニグロ狂詩曲」でデビューし、歌曲集「動物詩集」はギョーム・アポリネールの詩によるもので1918~1919年の作曲である。この間1918~1921年は兵役に服している。独学で始めた作曲であったが、ミヨーの勧めで1921年から1924年までシャルル・ケ克蘭のもとで研鑽を積み、バレエ音楽「牝鹿」で名声を博した。彼は声楽を中心として作曲しており、ピアノ曲でさえ、歌の伴奏から発展したものが多く、声楽をよりどころとしていたため、声楽曲が多く約70曲を歌劇、歌曲、合唱曲で占めている。次に多いのがピアノ曲で、2つのピアノ協奏曲を含んで約50曲である。他に室内楽、バレエ音楽を書いている。管弦楽曲も数曲あるが、交響曲は1曲も残していない。

彼の作品は大きく3期に分けられる。第1期は独学の時代で「ニグロ狂詩曲」を書いた1917年からピアノの小品集の「6つの即興曲」「組曲」等の作品までの1921年兵役終了の頃までとしたい。第2期は基礎的勉強を始めた頃、ミヨーとオーストリア、イタリアを旅行し多くの刺激を受け、1924年に発表したバレエ音楽「牝鹿」を発表した頃から1934年の「ユーモレスク」、「ナゼルの夜会」頃までとし、充実した時期でもあり、多くの小品集を書いている。第3期は1936年に友人の作曲家フェルーの自動車事故死に接し、宗教的な曲を多く書いた頃から1963年までで、円熟した作品を残している。女声合唱曲「黒衣の聖処女へのリタニー」は1936年の作である。この頃から大作がつづき、3つのオペラ「ティレジアスの乳房」(1944年)、「カルメル会修道女の対話」(1953~1956)、「人間の声」(1958)や1949年の「ピアノ協奏曲」、1951年のピアノ曲「主題と変奏」は充実している。最後の作品は1962年に書かれた「オーボエとピアノのためのソナタ」と「クラリネットとピアノのための

ソナタ」である。

4. プーランクのピアノ曲

彼のピアノ曲の特徴は第1に旋律に対する感覚のすばらしさ、フレージングのしなやかさであろう。声楽を心の糧として作曲された部分が多く、メロディからの発展された形が多い。次に軽妙さ、エスプリ、即興性、リズムミクナ動き、流動性、それに爽快感が加わる。

曲の手法としては意表をつく転調、突然の不協和音、半音階的の下降等が彼の好みである。いずれも小品を集めた組曲が多くみられ、3曲組みには「3つの無窮動」、「組曲ハ長調」、「ナポリ」、「3つの小品」があげられる。少し多く集められたものには12曲からなる「プロムナード」、8曲にプレリュード、カデンツァ、フレナーレを加えた「ナゼルの夜会」がある。全体的に短い曲が多いためか反復記号をあまり使わない。わずかに「3つの無窮動」と「主題と変奏」の1部にみられるだけである。彼はまた、作品番号を使わず作曲した年号を入れる。

次に組曲「ナポリ」を楽譜に表わされている特徴的な音型や記譜法を分析したい。

第1曲 バルカローレ

Assez anime ♩ = 152 ~ 160  $\frac{12}{8} = \frac{4}{4}$  37小節  
左のオスティナート風な動きで7度、9度音程の上にメロディがのる。(譜例1)

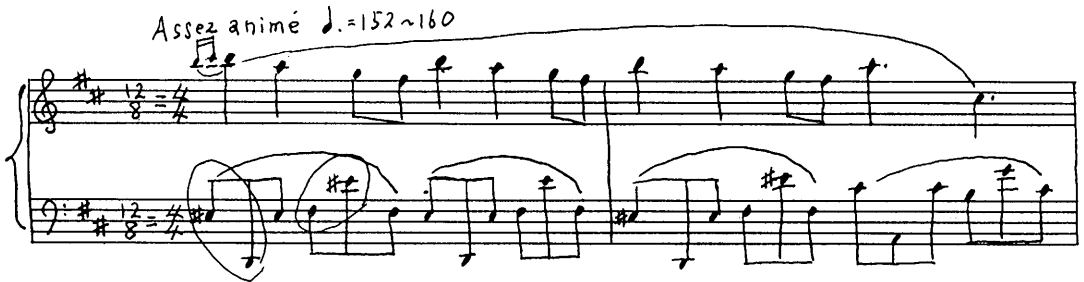


図1 譜例1 バルカローレ冒頭

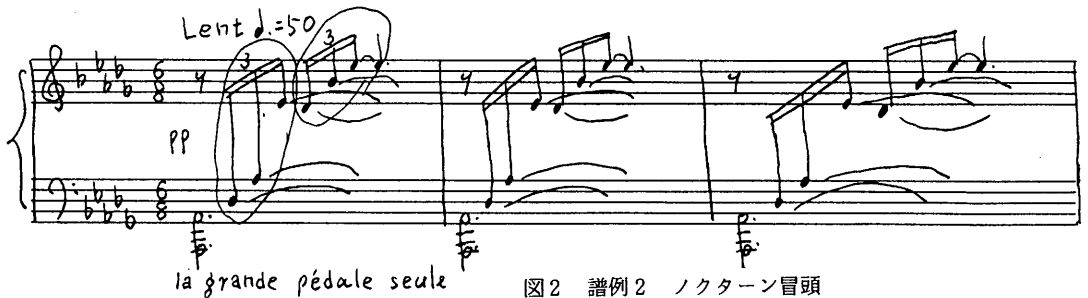


図2 譜例2 ノクターン冒頭

第2曲 ノクターン

Lent ♩ = 50  $\frac{6}{8}$  59小節

- (1) 同型の伴奏を7小節にわたり繰り返している。やはり9度音程である。(譜例2)
- (2) 3段譜表の使用はすでにドビュッシー等が行っており新しい記譜法ではないが、上2段を $\frac{6}{8}$ のままにして、3段目のベースを $\frac{2}{4}$ にしている。拍子的には $\frac{6}{8}$ は2拍子系の複合拍子であるので、演奏は可能である。(譜例3)

第3曲 カプリス イタリアン

Presto ♩ = 112 ~ 113  $\frac{2}{8} = \frac{6}{16}$  336小節

- (1) ♩ = 112 ~ 113 となっているが楽譜の中にこの単位を見いだすことはできない。
- (2) 速い曲であるのでテンポのルバートを好まなかった。そのため sans ralentir, ceder a peine のような言葉で、おそくしないようにと注意している。ただ1ヶ所のルバートも legerement rubato (少しだけルバート)と書かれている。(譜例4)
- (3) タイの省略された形で、小節の始めと終りに付けられた短いタイのみ本来のタイとして有効であり、小節の始めにのみ付けられた場合はタイとして考えない。(譜例5)
- (4) 各所にみられる速いパッセージの装飾。(譜例6)
- (5) 7度音程の連続。(譜例7)

Handwritten musical score for Nocturne 15-18 measures. The score is written for piano and features a treble and bass clef. The key signature has two flats (B-flat and E-flat). The tempo is marked 'p' (piano). The bass line includes the instruction 'mf en dehors' circled in red. The melody consists of eighth and sixteenth notes with slurs and ties.

図3 譜例3 ノクターン15~18小節

Handwritten musical score for Capriccio Italiano 208-211 measures. The score is written for piano and features a treble and bass clef. The key signature has two flats (B-flat and E-flat). The tempo is marked '3/8'. The bass line includes the instruction 'leggerement rubato' circled in red. The melody consists of quarter and eighth notes with slurs and ties.

図4 譜例4 カプリシオイタリアン 208~211小節

Handwritten musical score for Capriccio Italiano 258-261 measures. The score is written for piano and features a treble and bass clef. The key signature has two flats (B-flat and E-flat). The tempo is marked '4/4'. The bass line includes the instruction 'animez un peu' circled in red. The melody consists of quarter and eighth notes with slurs and ties.

図5 譜例5 カプリシオイタリアン 258~261小節

Handwritten musical score for Capriccio Italiano 243-244 measures. The score is written for piano and features a treble and bass clef. The key signature has two sharps (F-sharp and C-sharp). The tempo is marked '2/4'. The bass line includes the instruction 'ff très brillant' circled in red. The melody consists of eighth and sixteenth notes with slurs and ties.

図6 譜例6 カプリシオイタリアン 243~244小節



図7 譜例7 カプリスイタリアン313～316小節

おわりに

6人組の活動は1923年には終りを告げようとしていたが、実際には1925年頃まで続いていた。しかし、何よりも彼等を結びつけたのは共通の美学、手法でなく変らぬ友情であった。各人の作品数も得意のジャンルも様々であったが、デュレは1921年にグループから離れたが、歌曲、合唱曲を多く書いている。オネゲルはスイス人であったが、フランスに移った後、交響曲、バレエ音楽をはじめ管弦楽曲、声楽曲と多方面にわたっている。タイユフェールはグループ中で唯一の女流作曲家であるが、室内楽曲、映画音楽に佳作を残している。ミヨーは300曲以上の多作であったが、重厚な曲もあり13の交響曲をはじめ声楽曲、バレエ音楽を書いている。オーリックは劇音楽、映画音楽にすぐれた手腕を発揮している。プーランクは声楽曲を中心としているが、ピアノ曲において魅力的な作品が多い。

印象派の作曲家がグループ的活動を行わなかったが、6人組は共同の活動をした点では異っている。絵画が先に来て、その刺激を受けて作曲された点では似ている。歴史的にみても同じ道を辿るような感じである。彼等がこの世を去って間もないにも拘らず、現代曲によくみられる難解な曲は少ない。特にプーランクの作品には親しみをおぼえる。いつの時代にも芸術は他の分野からの刺激をお互いに受けるものである。特に声楽曲においては詩歌なしでは生れないし、絵画から音楽は連想されて作られ、その逆もあるであろう。オペラとなると音楽、バレエ、美術が総合されたものとなる。新旧交互にあらわれる主義や表現は繰り返えされていく。今後、どのような流れが出現するのであろうか。

引用文献

- 1) エヴリン・ユラル＝ヴィルタル 飛幡祐規：フランス6人組，晶文社（東京），1989，P 73

参考文献

- ノーマン・デマス 徳永隆男：フランスピアノ音楽史，音楽の友社（東京），1964  
 大宮真琴：最新名曲解説全集7，音楽の友社（東京），1981  
 大宮真琴：最新名曲解説全集10，音楽の友社（東京），1981  
 吉田泰輔：最新名曲解説全集13，音楽の友社（東京），1981  
 末吉保雄：最新名曲解説全集17，音楽の友社（東京），1981  
 末吉保雄：最新名曲解説全集20，音楽の友社（東京），1981  
 末吉保雄：最新名曲解説全集24，音楽の友社（東京），1981  
 高橋英郎：最新名曲解説全集補3，音楽の友社（東京），1981  
 磯山雅：名曲大事典，音楽の友社（東京），1985  
 遠山一行：ラルース世界音楽人名事典，福武書店（東京），1989  
 遠山一行：ラルース世界音楽事典下，福武書店（東京），1989  
 岸辺成雄：音楽大事典1，平凡社（東京），1983  
 岸辺成雄：音楽大事典3，平凡社（東京），1984  
 岸辺成雄：音楽大事典4，平凡社（東京），1984

岸辺成雄：音楽大事典5，平凡社（東京），1984

エヴリン・ユラール=ヴィルタール 飛幡祐規：フランス6人組，晶文社（東京），1989

Francis Poulenc: Napoli, Salabert (Paris)

Francis Poulenc: Les 15 Improvisations, Salabert, (Paris)

Francis Poulenc: Trois Pièces, Heugel (Paris)

Francis Poulenc: Nocturnes, Heugel (Paris)

Francis Poulenc: Les Soirées de Nazelles, Durand (Paris)

Francis Poulenc: Theme Varié, Max Esching (Paris)

参 考 楽 譜

Francis Poulenc: Mouvements Perpétuels, Chester  
(London)

---

Summary

The group of six was named by a critic in 1920. Their names are Durey, Honegger, Tailleferre, Milhaud, Auric and Poulenc. Satie and Cocteau were connected with them. They had many meetings and some concerts. I tried to approach their works with piano pieces as central figure. Poulenc composed the largest number of piano pieces among them. He wrote light and witty works with extempore sense and developed them on the authority of vocal music.